

「薬物依存症 本人・家族への介入と支援」研修会

講師プロフィール

佐藤 嘉孝 氏（岡山県精神科医療センター 作業療法士）

地方独立行政法人 岡山県精神科医療センター 依存症部門にて、日々、様々な依存症治療を、入院／外来（集団／個別）、訪問で行っている。

マトリックス研究所やUCSD^{※1}、マインドフルネス センター、MHA ビレッジ ロングビーチ^{※2}などで研修を修了している。

※1 UCSD (University of California, San Diegoカリフォルニア大学サンディエゴ校) は米国に10校あるカリフォルニア大学の一つで、1960年に設立。

※2 MHA ビレッジ ロングビーチは、ロサンゼルス郡精神保健協会(MHA : Mental Health America of Los Angeles)が、1990年から公的資金によりロングビーチで運営している、統合的な精神保健サービス機関である。

鳥取ダルクについて（朝日新聞デジタル 2020年6月25日 鳥取版より抜粋）

覚醒剤などの薬物依存からの回復を目指す民間リハビリ施設「鳥取ダルク」が今月、開設から15年を迎えた。入寮者らは自身と真摯（しんし）に向き合う。一度は踏み外してしまった人生を再び生きようと回復のための毎日を過ごしている。

鳥取県岩美町牧谷。水平線を見渡せる小高い丘の上に鳥取ダルクはある。かつて教会の保養所として使われた木造2階建ての建物に現在18人が入寮。多くは薬物依存症者で、中にはアルコール依存症の人もいる。

活動の中心は仲間同士で行うミーティングだ。自身の過去や経験を吐き出すことで客観的に自分を見つめる。午後7時からは施設外で開かれる自助グループのミーティングにも参加する。

中国地方初のダルクとして2005年に設立。走り出しは順調とはいえなかった。初代施設長が開設から1年足らずで再発し、姿を消した。急きよ新たな施設長として赴任した千坂雅浩さん（59）は「入寮者同士のトラブルも絶えず、ぐちゃぐちゃだった」と当時を振り返る。

変化をもたらしたのは、10年に導入した4段階のフェーズ制。達成項目に応じて入寮者の段階が上がる仕組みで、上のフェーズにいけばできることも増え、部屋長やハウスリーダーといった役職も担う。

導入直後は入寮者からの反発も強かったが、2年ほどかけて定着させると施設内の空気も柔らかくなった。最低限の上下関係を設けたことで部屋長などに悩みを相談しやすくなり、役職を与えられたことに伴う責任感や周囲への気配りの気持ちも抱かせた。フェーズ4でハウスリーダーの海人さん（48）は「自分中心の考えがダルクに来て変わった」と話す。

「依存症ってね、やめたいと思ってからが地獄なんですよ」と千坂さんは言う。社会や自分自身に絶望し、回復を前に両親の墓石の前で命を絶った仲間も見てきた。それでも自らも苦しんだ薬物使用という負の過去が、同じように苦しむ誰かのためになると願い、施設を見守り続けてきた。…（記事：矢田文）

FAX 送信票

2020 年度 鳥取県アルコール健康障害・薬物・ギャンブル等依存症支援拠点機関事業 「薬物依存症 本人・家族への介入と支援」研修会

2020 年 11 月 28 日（土）14：00～17：00

参加申込書

参加申込先 社会医療法人 渡辺病院 松村 行

① FAX 0857 - 24 - 1024 ②E-mail : k.matsumura@mmwc.or.jp にて申込可
※申込期限は 11 月 18 日（水）です。②のアドレスに、メールにて申込書の内容を記載するか、スキャンした申込書を添付し、送付することもできます。

出席方法

① 会場での参加 先着 20 名で制限させていただきます。

② Web（Zoom）で参加^{（注）}

（メールアドレス：_____）

（注）Web での配信は Zoom による配信を予定しております。

「Web 参加」を希望される場合は、事前にご自身のパソコン又はスマートフォン等に Zoom アプリ（無料版）をインストールしていただきますようお願いいたします。後日、詳細をメールにてお知らせさせていただきます。

発信元

所属：_____

名前：_____

連絡先：TEL _____（FAX _____）

参加者

所 属	氏 名